

こわだニュースレター

継続と魅力が詰まった田植え～稲刈り授業～

今年で21年目になる松林小学校生徒達による稲刈り作業が、10月21日（月）に松林通りそばの稲田にて行われました。いつもは静かなこの地域も朝早くから松林学区青少年育成推進協議会の方々や松林小学校PTAの方々、そしてこの地域に住まうベテラン農家の方々まで揃い、小学校の生徒達が到着するまで脱穀機の準備などに追われていました。

島崎新宿自治会長による稲刈り鎌の使い方指導後、6年生と5年生が時間を分けて順番に稲刈り作業に取り組みました。

今年は、台風等による雨の日が続いたため、田んぼの中がぬかるんで思うように歩けず、生徒達もおっかなびっくり。でも、次第に楽し気な歓声に変わってきて生徒達は大変楽しそうでした。

採れたお米の量は約300Kgと例年通りでしたが、刈り取った稲は脱穀・精米後にもち米として来年1月に餅つき大会で生徒さん達の口に入ります。さらに、餅つきで残ったお米はお赤飯となって給食を彩ります。

この授業を始めたばかりの頃は、主に5～6年生を中心として行われていました。しかし、今は1～2年生が代掻きをし、4年生が育苗箱に籾種を蒔くなど、学校を挙げた授業となっています。

稲刈り鎌の使い方指導後の様子



稲刈りの様子

千ノ川をはさんだ小和田コミセンの周りが一面の田んぼだった時期はそんな昔の話ではありません。レンゲの花々が咲き誇っていたこの田園地帯も、ここ半世紀の間に次々に宅地造成が進み、今では田んぼを継続している農家さんは数えるほどしか見ることができなくなりました。

その田んぼには相模川の中流の相模原市から延々20キロメートルもの水路が「相模川左岸用水路」としてこの小和田地区の灌漑用水として引かれています。事業開始は1931年と80年以上前からの歴史ある用水路で、室田ポンプ場での揚水を経て、最終到達地としての松林小学校演田にも届いています。

今は暗渠となりましたが、千の川に勢いよく流れ込む清流を田植えの時期に見た方も多いのではないでしょうか。

松林小学校の校長先生は5月の籾種蒔きから6月の田植え、そしてその刈り取り、最後に餅つきを経て、実際に口に入るまでの作業を生徒達自らが体感できる幸せを味わえるのは素晴らしいことだと語っていました。

茅ヶ崎でも珍しい小学校生徒達による稲作をこれからも続けていけることを願っています。

※小和田地区コミュニティセンター30周年記念誌「こわだ」を参考にさせていただきました。